

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 66 号

平成19年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

金田福一「日々の糧 365 日」より（5）

9月15日

もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。

.....自分の弱さ以外には誇りません。

（ コリント 11・30、12・5 ）

信仰には、「強さ」があってはいけないと思います。私にも、気のつかないうちに、「強さ」の出ていることがあるかも知りません。その時には、砕いていただかなくてはなりません。「強さ」の感じられる人には、いつも問題を感じます。ゆだねてしまえば、強さはないはずです。「強さ」とは、「おのれ」という人間が出しゃばることですから、キリストに栄光を帰するよりもおのれに栄光を帰するおそれがあります。当然、「強さ」のあるところには、他を攻撃する傲慢があつて、頭を垂れる罪告白や、教えを乞う謙虚さはありません。牧師に「強さ」があれば、信徒にもあるでしょう。恐ろしいことです。

9月17日

あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてください。 (テサロニケ5・24)

イエスさまは、「人間をとる漁師にしてあげよう」と言われました (マタイ 4・19)。パウロは「してくださる」と言いました。キリスト者の倫理の根源は、人間の努力ではなく、生けるキリストのみわざなのです。服従することも、礼拝を守ることも、まじめになることも、人を愛することも、献金をすることも、早天に出席できることも、ことごとく、人間の努力ではなく、キリストの恵みのみわざなのです。「努力はいらない」とは、キリストにのみ栄光を帰する意味であって、この点における厳密さは、絶対に、崩されてはならないのです。それが、純粹な、福音の継承ということなのです。

9月19日

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。 (ヨハネ 3・16)

イエスさまのそば近くにいて、いつもみ言を聞き、そのみ力に生かされていれば、不平をもらすとか、つぶやくとか、腹を立てるとか、人を呼びつけて叱責するとかというような、そんな恥ずかしいことは、とてもできなくなります。そんなことをしなくなるのは、私たちの力ではありません。イエスさまがして下さるのです。イエスさまから離れてはいけません。イエスさまは、私たちの罪を、ご自分の身に感じられました。このことによって、イエスさまのそば近くに招かれた人は、自分の罪が分るのです。そして謙遜になるのです。人の罪を、自分の罪とを感じるようになるのです。それが、ほんとうの愛なのです。

9月20日

だから、明日のための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。（マタイ6・34）

現在の一瞬一瞬を、どのように生きるかが問題です。生きることは耐えることです。現在を生きられなくなるのは、現在の苦しみに耐えられなくなるよりも、あす日への暗い予想に、耐えられなくなることの方が多いのです。予想し、空想するあすの暗さは、現在の暗さよりも、はるかに深いものです。現在の苦しみに打ち勝つのは、あすへの暗い予想に打ち勝つことでもあるのです。そして、神を信じるということは、あなたのあすを、主にゆだねることなのです。あすへの暗い予想を、主にゆだねてしまうならば、現在の一瞬一瞬が、たとえ苦しくとも、明るく生きられるようになるのです

9月27日

「あなたがたの知っているとおり、2日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」

（マタイ26・2）

福音から行為は生れますが、行為が少しでも強調されると、もはや福音ではなくなります。身を粉にして祈ろうと、なぜそれを口にするのですか。努力して長く祈ったから救われたのですか。そのように思わせるとしたら、恐ろしいことです。全財産を献げようと、なぜそれを口にするのですか。なぜ、黙ってしないのですか。献げたから救われたのですか。祈りの長さや努力や、献金の徹底が、救いに影響するのですか。人間のしたことや、することが、それほど必要なら、主はなぜ十字架におかかりになったのですか。わたしたちが救われるのは、行為ではなく、キリストの十字架によるのです。ここに立つべきです。

9月30日

しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるので
す。(コリント1・23)

「信仰」という名の、人間の努力や、業績や、強さが、評価されて
いるような気がしますが、人間の側の価値は、絶対に否定されなけ
ればなりません。十字架の主の前に、何の価値があるのでしょうか。
もし、「信仰」と称する価値を振り回すとしたら、それは、おのれみ
ずからを知らぬ人間の、愚かな姿態に過ぎません。キリスト者の人
生と、その存在は、彼の「信仰」にかかっているのではなく、主の力
と、みわざの証明にすぎないのです。それでは、「信仰」とは何でし
ょう。それは、生けるキリストと、そのみわざとを確かに知り、そ
のみ力に生かされるようになった人間の、その心に燃える感謝以外
の何ものでもないのです。

10月2日

そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のも
のです。(コリント3・23)

牧会者はイエスさまです。愚かな伝道者が妨げることはあっても、
やはり、牧会者はイエスさまです。イエスさまは、そこに連なる一
人一人が、明確に、福音を体験することを望んでおられます。一人
一人が、お救いの中に入れられて、「主のもの」とされていることを、
確信することを望んでおられます。もしも、この確信がないならば、
人間の義や、傲慢や、不安があるでしょう。それらは、人間の罪の
結果です。その罪のために、主は十字架にかかって下さったのです。
お救いにあずかるならば、そこには、謙遜と、平安と、喜びとがあ
るでしょう。福音は、焦燥ではありません。平安と、憩いと、解放
なのです。

10月7日

神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。(テトス3・6)

リバイバルは、神ご自身が起こされた場合と、人間が起こした場合とがあります。集会指導の能力のある伝道者が、熱烈な祈りを指導すれば、そういう状態になります。しかし、真に聖霊によるものでなければ、すぐに消えます。個人も、教会も、聖霊の傾注により、霊的覚醒によって飛躍します。けれど、一貫して教会を支えるものは、聖書の健全な学び、即ち、信仰義認、十字架と復活、生けるキリストについて、うむことなく語られることによります。真のリバイバルは、神が聖霊を注がれることによって起こるのです。必ずここでは、人間の罪が示され、キリストの十字架があがめられるのです。

10月8日

むなしいものを見ないように私の目をそらせ、あなたの道に私を生かしてください。(詩篇 119・37)

子供を道連れにした一家心中ほど、心の痛むことはありません。生きていることの価値を自分で判断して、子供を道連れにするというようなことは、人間のわがままの極致というものです。子供が成長して、人を幸せにする人になるかも分らないのです。ただ一人の人に親切であったとしても、人間の、存在の価値はあるのです。子供の成長のためならば、親は、どんな恥をしのんででも、生きていくべきだと思います。生きていることが、どんなに困難であったとしても、また、どんなに恥ずかしくとも、人間は、生きていかなければならないのです。それが、人間に与えられた尊い義務であると思います。「主を求めて生きよ」(アモス5・6)。

10月9日

なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。

(ヨハネ5・4)

イエスさまに出会うと、人間が変わります。救われるのです。生まれ変わるのです。生かされている「今」を、感謝できるようになります。重い病気の今、感謝です。激しい痛みの今、感謝です。悲しい出来事の中で今、感謝です。つらいことばかりであったが、今感謝です。ばかにされていると思っていたが、今感謝です。どうにもならない今だけれど、主にゆだねて感謝です。家庭がどんな状態であろうと、今感謝です。どんな悪い知らせがきても、感謝です。たとえ子供が、重度の障害者であったとしても、イエスさまの愛を知った今、感謝です。この世を去る時も、数々の恵みを思い、み国を慕うて感謝です。

10月12日

あなた方も、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主とにならう者となりました。

(テサロニケ1・6)

「救われた」という確信は、聖霊の注ぎによって与えられます。「イエスさまが私のそばに居て下さる」と気づくことも、「私の内に居て下さる」と悟ることも、聖霊の注ぎによるのです。あなたはキリストの愛の「中に」居ましたか。あなたをキリストの愛の「中に」入れるのも、聖霊のお働きなのです。あなたに勝利が無かったのは、聖霊の注ぎの体験が、無かったからではありませんか。キリストの愛の「中に」、居なかったからではありませんか。あなたはその生活と、祈りと、礼拝において、聖霊の求めを明確にすべきです。もしも、まだ持っていないならば、弁解すべきではありません。聖霊を受けなさい。

10月15日

もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることになる、と信じます。（ローマ6・8）

自我に立って、自己本位にもの考えるならば、不平の種はいくらでもあるものです。今日までの歩みをふり返ってみて、いつでも感謝を覚えるとしたら、その人は救われた人です。むりに感謝するのではありません。自我が砕かれた魂は、敏感に感謝できるのです。また、新しい困難や悲哀に、立ち向かわねばならないこともあるでしょう。そこにおいてもまた、主はともに居て下さり、慰めて下さり、耐えさせて下さるでしょう。現在よりも、過去の方が明るく見えたとしても、感謝以外の回顧は無用です。明日がいかに暗く見えようとも、キリストとともに、静かなる前進があるのみです。我に従いきたれ！

10月17日

私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。（ローマ8・35）

すべてのキリスト者に、聖霊経験が必要です。それは、私たちの努力によって作り出すものではありません。あなたを聖別するキリストの力をお受けすることです。ただ、「祈り待つ」という、「お受けする姿勢」が必要であることは、言うまでもありません。もしその経験を否定するとしたら、それは、キリストの働きかけとみわざとを、不要として拒否することになります。そういう人の信仰生活は、神の恩寵のわざではなくて、その人の精神活動にすぎません。その人の頭で考えたことにすぎません。そこには何の奇跡もないでしょう。しかし、信仰生活とは、キリストの愛の体験にほかならないのです。

10月18日

ああ、私はとがある者として生まれ、罪ある者として母は私をみ
ごりました。（詩篇 51・5）

彼は実に罪深い人間です。美しい女性を見れば誘惑を感じ、金を見れば盗みたくなり、人にほめられようとさえするのです。しかし神は、そういう罪人をこそ純粋な福音の継承者として選び、十字架のキリストを信じれば義とされ、生けるキリストと交わることによって潔められていくことを、お示しになったのです。おのれの罪に対して鈍感な人間は、福音を継承し得ないのです。彼は実に罪深い人間です。しかし彼は、人間というものの本質であり、典型であるということです。純粋に福音を継承し得る人間とは、おのれが罪人にしかすぎないことを、深く知る人間です。「私はその罪人のかしらです」（テモテ 1・15）

10月20日

主よ、私のたましいは、あなたを仰いでいます。わが神。私は、
あなたに信頼いたします。（詩篇 25・1-2）

「主よ、私のたましいは、あなたを仰いでいます」キリスト者とは、いつも主を仰いでいる人です。生涯、主を仰ぎ望む人です。キリスト者はいつも、イエスさまと向かいあっているのです。イエスさまは透明なお方ですから、視界の邪魔にはなりません。キリスト者は、肉眼には見えないキリストの存在を、眼前に確信しつつ、現実を見るのです。キリストを通しての、ものの見方です。隣人との交わりも、キリストを通してです。かつては皮肉に感じていた隣人の言葉も、キリストを通して聞くと、毒は消えます。隣人への言葉も、キリストを通過させると、柔和になり、神のみ旨にかなう言葉に、変えられるのです。

10月22日

「ザアカイ。急いで降りて来なさい。今日は、あなたの家に泊ることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りてきて、大喜びで、イエスを迎えた。(ルカ 19・5-6)

イエスさまは、私たちのような、きたないままの心の中に、お入り下さり、住んで下さいます。これを「キリストの内住」と言います。「福音の奥義」です(コロサイ 1・27)。私たちは絶えず、来て下さった主をあがめ、主にお仕えいたします。「キリストの内住」ということは、自己を神化することではありません。主を心の中にお迎えすれば、自分のみにくさは、いよいよ鋭く自覚され、自分に対してきびしくなります。罪は、鋭く示されることによって、鋭く潔められていくのです。しかも、主に赦されている平安と、感謝と喜びは、少しも動揺することはないのです。

10月23日

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

(ヨハネ 3・36)

肉親の親子のつながりは、天国では通用いたしません。親がキリストを信じたように、子供がキリストを信じるならば、そこに、キリストのいのちを分けた、兄弟のつながりが生まれます。伝道することのすばらしさは、一人のたましいを、キリストのいのちに、つなぐことです。こうして、永遠のいのちは、継承されてきました。肉体は死んでも、キリストのいのちにつながれた、そのつながりは永遠です。わたしは先日、そのことを強く示されて、天的な感動におののきました。兄姉よ、あなたの受けているキリストのおいのちを、あなたは誰につなぐべきですか。あなた一代で、とぎれるべきではありません。断じて！

10月26日

そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリスト
についてのみことばによるのです。（ローマ10・17）

キリストが復活されたことが語られなければ、どうして生けるキリストのお会いできるでしょう。生けるキリストが語られなければ、どうして救われる人がありましよう。救われるということは、人間の自己変革ではありません。生けるキリストの、人間変革のわざなのです。悔い改めが語られなくて、どうして悔い改める人がありましよう。回心が語られなくて、どうして回心する人がありましよう。聖霊に満たされる必要が語られなくて、どうして聖霊に満たされる人がありましよう。キリストの復活が、生けるキリストの臨在が、救いが、回心が、聖霊の満たしが、今日の教会において、語られているでしょうか。

10月29日

この戦いであなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かす
にियो。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。（歴代20・
17）

「イエスさま、あなたを心にお迎えいたします」と言いなさい。勇気をもって、口にしなさい。そのすぐあとで、悩みや、不安や、悲しみが、心に起こっても、これからはあなた自身で戦わなくとも良いのです。それらのものに、とりこにされることもありませんから、安心しなさい。それらの思いが心に起こったならば、「主よ、感謝します」と口にしなさい。悩みや、不安や、悲しみを、あなたの心から取り除いて下さるのは、イエスさまだからです。小切手をもらったら、銀行に行く前にお礼を言うように、すぐに、「主よ、感謝します」と、お礼を言いなさい。この言葉は、神の力が流れてくるスイッチです。